

河川環境整備に関する一考察

長崎大学大学院 学生員 ○坂下 智慎

長崎大学工学部 正 員 野口 正人

1. はじめに

近年、河川周辺の環境整備に対する関心が高まってきている。これは人々が余暇時間を利用して様々な活動を行うための場所が必要となってきたことや、河川環境保全に対する関心の高まりが要因としてあげられる。またそれに対応して、行政当局も水辺の開発を中心とした“まちづくり”、“ふるさとづくり”等に関する事業を推進するという例が多くみられるようになった。しかし、治水面からは、レクリエーション施設や親水公園の整備にあたって、安全性を保つ施設の整備や河川に関する情報提供など、ハード・ソフト両面にわたる心配りを怠ってはならず、河川環境整備は現行のような施設を建設するといった側面とともに、人々の水意識を高揚、変革させる諸施策の必要性も忘れられるべきでない。

本論ではイギリスのテムズ川での事例も参考としつつ、今後の望ましい河川環境整備の在り方について考察する。

2. テムズ川での水辺利用のアンケート調査

1989年11月、著者の一人が現地で「河川環境に関する住民の水意識調査」を行った。風土、風習の違いもある外国の事例ではあるが、河川環境が国民に良くとけ込んでいるといわれる河川でもあり、ウォーターフロントに関して参考すべき点も少なくない。

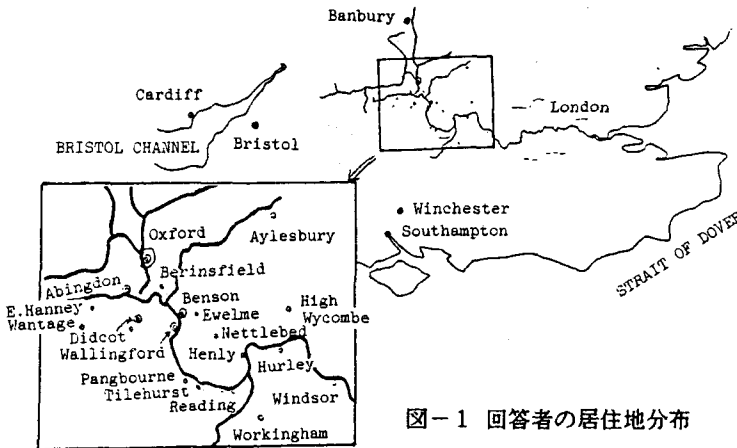


図-1 回答者の居住地分布

このアンケート調査は、オックスフォードからレディングまでの地域で実施されたことから(図-1)、その回答者の多くがテムズ川に出向いており、川への接触は月に2、3度となっている。また表-1によれば、河畔での行動は80%の者がその目的を散歩としてあげ、その他、順に休息、観光・景観鑑賞、バードウォッチングなどが続いており、比較的静的に河川環境を楽しんでいる感じが強い。次に表-2にまとめられた河川環境に対する質問の回答を数量化理論Ⅱ類を用いて解析した。この結果を示せば図-2のようである。横軸に「10年前の河畔の景観との比較」、縦軸に「10年前の河川の水質との比較」をとり、外的基準を「河川環境整備に対する満足感」として相関をとったものであ

表-1 河畔での行動(重複回答可)

rest	10	swimming	3
walking	43	camping	0
running	3	sailing	1(4)
cycling	2	sight-seeing	10
driving	1	bird-watching	7(9)
fishing	4	others	10(5)

表-2 河川環境に対する質問
10年前の河川の水質との比較

1. It is similarly clear.	11(20.8%)
2. It becomes clear.	8(15.1%)
3. It becomes worse.	18(34.0%)
4. It is similarly polluted.	6(11.3%)
5. no opinion	7(13.2%)
6. others	0(0.0%)

10年前の河畔の景観との比較

1. It is similarly pleasant.	26(49.1%)
2. It becomes pleasant.	6(11.3%)
3. It becomes unpleasant.	9(17.0%)
4. It is similarly unpleasant.	1(1.9%)
5. no opinion	7(13.2%)
6. others	0(0.0%)

河川環境整備に対する満足感

1. yes	18(34.0%)
2. no	31(58.5%)

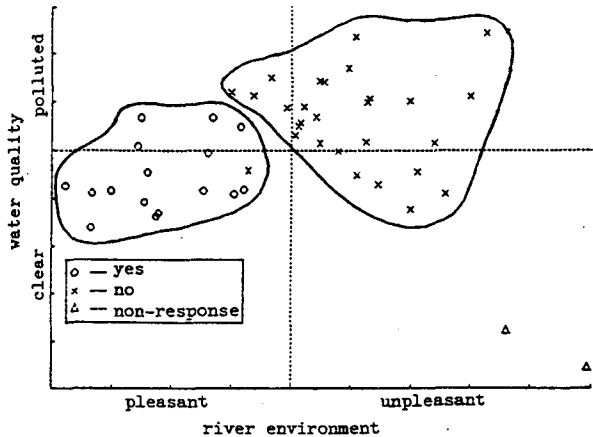


図-2 河川環境整備に対する満足感

る。この図より河川環境整備に対する満足感は水質よりも河畔の景観によってよく判別されていることがわかる。また水質の悪化が必ずしも不満につながるとは言えない結果となった。

表-1「河畔での行動」の結果は、ウォーターフロントを形成する個々の施設は人々がたたずみ、付近を歩けるものであるという前提を満足している。既述の如く、水質よりも景観の方が河川環境に対する満足感をよく判別していることを考えれば、本調査においては水質に問題があると答えた人も叙述式設問に回答した者の半数以上であり、人々が水辺に集まるためには河川の水質浄化も軽視されるべきでないことがわかる。

3. 河川環境整備への提案

河川環境整備が抱える諸問題を解決するためには、治水・利水に関する長期の広い視野にわたる施策の理解等、人々の水に対する意識の高揚が必要である。今、まさに人々の水辺に対する関心が高まり河川の親水機能を充実させることが期待されている。しかし、現行のものでは親水公園であっても単なる都市公園におわたり、レクリエーション施設にしても河川の近くにあるというだけで、まだ水意識を高揚させるまでには至っていない。

治水上ハード面と同時にソフト面が整備されなければならないことは前述されたとおりである。そこで、今後水辺にはソフト面での整備を充実させることが望まれる。例えば施設に、人々が防災情報を提供されるような場を持たせたり、河川の役割や危険性などを知ることができる施設をつくる等の配慮が考えられる。人々の河川環境への関心が増したのは、近年の自然災害の減少傾向もその一因であるといわれるが、河川への親しみと同時に災害や環境破壊、河川環境整備に対する人々の理解を少しでも深める努力が必要である。

4. おわりに

本論では、親水空間の整備を進めるうえで、河川全体に対するソフト面を充実させることの重要性について述べられた。この種の諸施策が人々の河川に対する理解を増し、わが国の個性ある水辺空間の創出に役立てられることを期待している。

〈参考文献〉

- 1) 野口正人・坂下智慎(1990): 住民の水意識を考慮した河川環境整備, 工水学論文集, Vol. 34 (印刷中)
- 2) 田中豊・垂水共之・脇本和昌(1984): パソコン統計解析ハンドブックⅡ 多変量解析編, 共立出版